

ブッダの般涅槃について

井 上 博 文

1. 問題の所在 : *Mahāparinibbānasuttanta* (以下 *MPS.*) はブッダの般涅槃を語る經典である。これまで *MPS.* の文脈から「ブッダの般涅槃」は「ブッダの死」と読み取られてきた。しかし、「般涅槃」或いは「涅槃」をパーリ文献から拾うと、必ずしも「死」を意味しない。また、ニカーヤにおける「涅槃」の定義や異名は「死」を想定していない。それどころか正反対の「不死」を見出すことができる。それ故「涅槃」＝「死」という構図は必ずしも当てはまらない。また、ニカーヤは「如来の死」に関して「無記」の立場を取る。以上から、*MPS.* はブッダの死を克明に記したものと解釈できる面と、他の經典と同様ブッダの教えを伝えるものと解釈できる面と二面を持つと考えられる。本稿は、*MPS.* が語る「ブッダの般涅槃」の意図を考察することを目的とする。

2. 如来の死後に対する無記説 : 如来の死後について、ニカーヤは「無記 (*avyākata*)」だという¹⁾。また「無記」と対応させて *vyākaya* (説くもの) と合わせた記述も見られる²⁾。そこでは「如来の死」に当たる原語は *maraṇa* であり、*nibbāna* やその類語ではない。そして「説く (*vyākata*) もの」は「涅槃」に導くための「法」であって、「如来の死」は「説かない (*avyākata*) もの」であるという。明らかに「死」と「涅槃」は区別されている³⁾。

3. 涅槃と不死 : 『相応部』(以下、*SN.*) の語る涅槃の異名には「不死」*amata* がある⁴⁾が、この中に「死」に相当する言葉は見出せない。また、涅槃と不死の定義が一致している。

私は聖なる八つの不死に至る道を修習して涅槃を成じ、法の鏡を見た。(Therī. 222)

友サーリブツクよ、涅槃、涅槃と言われます。しかし何が涅槃なのか。

友よ、貪欲の滅、瞋恚の滅、愚痴の滅、これを涅槃と言うのです。(SN. IV p. 251)

尊者よ、不死、不死と言われます。しかし何が不死なのか。何が不死に至る道なのでしょうか。比丘よ、貪欲の滅、瞋恚の滅、愚痴の滅、これを涅槃と言うのです。(SN. Vp. 8)

つまり「涅槃」は「死」よりも「不死」との関係が密接であり、むしろ不滅性

を示す言葉と言える。少なくとも「涅槃」が「死」を表しているとは断定できない。また、「不死」*amata* は、否定辞 *a+mata* で字義をみても「死」を否定している。

不放逸は不可の句であり、放逸は死の句である。不放逸の者たちは放逸なる者たちが死ぬようには死なない。(Dhp. 21)

以上の記述を見ても、「不死」が「死」を否定していることは明らかである。

4. 悪魔と般涅槃：ブツダが般涅槃を決意した場面において、悪魔が現れ、ブツダに再三般涅槃を勧める⁵⁾。その悪魔を定義する資料⁶⁾は悪魔と死との密接な関係を示す。原語 *Māra* は、死を意味する語根 $\sqrt{mr}$ から派生し、漢訳では「死魔」といわれる⁷⁾。

この洲は無所有で無所著に他ならない。「涅槃」と、それを老いと死の滅尽と私は言う。これを了知して、現法で涅槃に向かって憶念する人々は、悪魔の権力に従わない。悪魔の奴隷にならない。(Sn. 1094-1095)

悪魔は通常ブツダの対立者⁸⁾であり、涅槃とは対極の存在であろう。その悪魔がブツダに般涅槃を勧めるのはむしろ特殊な事例と考えられる。では何故に MPS. がこの様な組み合わせを用いたのであろうか。これに対する答として二つの可能性があると考えられる。

I：「ブツダの死」から「ブツダの般涅槃」への書き換え。

MPS. より先に「ブツダの死」を語る文献が存在し、「死」に相当する箇所を「般涅槃」に書き換えた。それ故に本来的に「死」との関連が深い悪魔が、「不死」と関連が深い涅槃を勧めるというある種の矛盾が残ってしまった。しかし、その文献は、存在した可能性はあると思われるが、実際現存するわけではなく、あくまで想定である。

II：MPS. 中における「般涅槃」観念の相違。

MPS. の前半部分は明らかに「ブツダの死」を意識して記された「般涅槃」がみられる。例えば、旅の道中、ヴェーサーリーでブツダは病にかかったが、次のように思ったという。

私が奉仕者たちに告げないで、比丘のサンガに許可されないで般涅槃することは、私にはふさわしくない。(DN. II p. 99)

そして上述のように悪魔がブツダに般涅槃を勧めるのである。このような「般涅槃」は、大いに「死」を意識している。しかし、ブツダの入滅の場面においては、直接死にゆくブツダを描かず、禅定の深まりをもって般涅槃に到るという表現をとる。この場面からはむしろ「死」は読みとれない⁹⁾。また、『聖求経¹⁰⁾』は

禅定と悪魔に関して次のようにいう。

比丘らよ、このように比丘は諸欲より離れ、不善の法より離れ、尋求あり、考察あり、離より生じた喜樂ある初禅に到達して住した。比丘らよ、(初禅に達して住した) この比丘は (次のように) 言った。悪魔に闇を与え、足無き者を殺して、悪しき者の眼に見えないところに行った。(MN. I p. 174)

この後、四禅、四無色定、滅想受を得た比丘に関しても同様のことをいう。この『聖求経』の記述と「ブッダの般涅槃」の記述を合わせると、やはり、「悪魔」と「般涅槃」が対立するものと分かる。つまり、MPS. 内に、「悪魔がブッダに勧める般涅槃」と、「禅定の深まりから到達する般涅槃」という内容の異なった「般涅槃」と見ることができ、死して尚不滅なるブッダを語ろうとしたと考えられる。

5. 小結： 以上、MPS. の前段階として「ブッダの死」を語る文献の存在を想定し、「ブッダの死」を「ブッダの般涅槃」に書き換えた可能性と、MPS. 内において観念の異なった「般涅槃」が存在する可能性の二つを指摘した。これらは、MPS. の成立と「般涅槃」の解釈に層があることを想起させるものではあるが、尚検討を要する。

-
- 1) SN. IV Avyākata-samyuttam, 2) AN. Vp. 194, 3) DN. I pp. 178-203 においても同様の事例が見られる。4) SN. IVpp. 362-372 5) DN. IIIp. 104 6) SN. IIIp. 189 7) 『雑阿含』に「死魔」の言及がある。大正2 p. 387b など。8) 八力廣喜 [1995] 「初期大乘經典における和平—マール—の誘い—」『日本仏教学会年報』61 において、マールは涅槃を目指す者にとって対極の存在であることが指摘されている。9) SN. I pp. 157-159 に「ブッダの般涅槃」の場面とほぼ同様の文章が見られるが、この文面だけを読んで、ブッダが亡くなったと読みとることは難しいと思われる。10) Ariyapariyesan-asutta, MN. I pp. 160-174

〈キーワード〉 般涅槃, 不死, 悪魔, 死

(龍谷大学大学院)